小学校体育授業における教師の運動に対する得意・不得意が学習者へのフィードバックに与える影響

坂本里利香（滋賀大学）

1. 目的

本研究の目的は、小学校の体育授業を対象に、授業者自身が指導を得意と感じている運動内容を取り扱う場合と指導を不得意と感じている運動内容を取り扱う場合において、教師の学習者へのフィードバックの差異を明らかにするとともに、学習者の授業評価に与える影響を明らかにすることである。

2. 研究方法

1）対象者：小学校第5学年の担任および教職歴12年目の男性教員と児童30名。

2）対象授業：授業者（M教諭）が不得意と感じているマット運動の授業「実践1」（全5時間）、得意であると感じている跳び箱運動の授業「実践2」（全6時間）。

3）調査内容：形成的授業評価票（長谷川ほか、1995）、態度測定による体育授業評価票（高田ほか、2000）、相互作用の観察カテゴリーを用いた記録（高橋ほか、1991）

3. 結果と考察

1） 授業前のM教諭への意識調査から、教諭指導が得意な運動は跳び箱運動、不得意な運動はマット運動であることが明らかになった。跳び箱動が得意な要因は、自身で模範試技ができること、教授するポイントを理解していることであった。マット運動が不得意な要因は、自身が子どもの時から嫌いで楽しくなかったこと、補助はできても見本やできない児童への支援に関して困難を感じていることであった。

2） 実践1および実践2のフィードバックの数の比較では、実践1では1時間当たりの平均は60。4回、実践2の平均は94。0回であった。実践2の方が、肯定的フィードバックの割合やM教諭から声をかけてもらった児童の割合、その声掛けが役立ったと回答した児童の割合が高かった。

3） 実践1と実践2の児童の授業評価の比較診断的総括的評価において、実践1では、総合評価は単元前後で「±０」から「＋」になった。「できる（運動目標）」、「まなぶ（認識目標）」は「±０」であり単元前後での変化はなかった。実践2では、「たのしむ（情意目標）」、「できる（運動目標）」が、単元前後で「±０」から「＋」になった。実践2は児童が楽しく学びを深め、技能が向上した授業であったと推察された。

4. 結論

M教諭にとって不得意なマット運動よりも、得意な跳び箱運動の方がフィードバックの総数が多く、M教諭の助言を受けた児童やその助言が役に立ったと感じた児童の割合、肯定的フィードバックの割合が高かった。また、形成的授業評価や診断的総括的評価においても跳び箱運動の方が単元経過とともに評価が上昇し、学びが深まったことが推察された。これらのことから、教師の運動指導における得意不得意はフィードバックの総数や内容に影響し、児童の授業評価にも影響を与えることが示唆された。

5. 主な参考文献

1）熊谷浩明・池田拓人（2013）小学校教師の体育好き・体育嫌い－子どもを体育嫌いにさせる教師行動との関連性―，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，23:47-55.